

糞と格闘する者は
たとえどれほど勝利に近づこうとも
最後は自分も臭う

ローガウ

覚えておくがよい
パンツのなかに私は糞をたれ
お前はそれを首にかけて口を拭うのだ。

ルター

二〇三〇年、七月二十四日、午後七時。

麻暮正作は観音崎の隠れ家で、大量の握り飯を作っている。

座敷牢ふうの檻が出来た。

鉄板と鉄格子とで作った簡易なものではあるが、作った玄治、竹田金之助、郷田狂介には、ヴァッセルヘルム大監獄よりも脱獄不可能なものと信じられた。

荒野大三郎、川上宙門、木下太郎は、その檻の中に入れられた。

川上が申し訳なさそうに、

「このなかに、トイレらしきものはないんでしょうか。

それと、あの握り飯は戴けるのでしょうか。

もうかれこれ三十時間何も口にしていません」

「解っているよ。

自分たちだって同じさ」

金之助が、便器代わりの洗面器と、沢山の握り飯を檻に入れた。

さっそく川上は洗面器で用を足し、木下は握り飯にかぶりついた。

「尿の音、おかずにひとつ、握り飯」

川上が一句詠んだ。

「握り飯、おかずになるか、尿の音」

木下が変えて詠んだ。

荒野は無言で、まったく動かなかった。

金之助たちは握り飯を頬張りながら、テレビ画面を見ていた。

七時のニュースが始まっていて、相変わらずテロの話題だった。

玄治が何気なくつぶやく。

「ニューヨークのライブ会場爆破、五十数名の死傷者か。

不謹慎だけど、荒野の計画を知っている我々としては、自爆テロと云うのはちっぽけなものだと思ってしまうなあ」

金之助が聞いていて感想を洩らす。

「もしも自分がテロリストだったとして、荒野の計画を知ったら、テロなんか莫迦莫迦しいと感じるでしょうね」

こんどは郷田がそれを受けて、

「テロリストには、膨大な資産と強靱な精神と想像を絶する虚無がないのよ。

祖国や宗教を信じて、己の行動によって己が救われるなんて、あんがいヤワなオプチミストなんだわ」

麻暮にとっては、テレビのニュースなんかどうでもよかった。

大事なことは唯一、荒野の処遇をどうするか。

麻暮は握り飯を作っていたときから考えていたが、その考えが具体化してくるのを自覚していた。

それは、荒野を永久にこの檻に閉じ込めておこう、と云うものであった。

たとえ海底都市や巨大コードを破壊しても、荒野が生きているかぎりには、また別の方法を考えるはずだ。

荒野を殺さずに、荒野の計画を阻止するには、それしかないとさえ考えた。

二〇三〇年、七月二十五日、午前七時。

麻暮正作は檻のなかの三人の様子を伺っている。

荒野大三郎は鉄板を背に座禅のすがたで瞑目している。

川上宙門と木下太郎は床に寝転がって絡み合いながら眠っている。

麻暮は格子から数本のペットボトルと幾つかの粽を差し入れると、同じものを持って庭に出て行った。

其処で、軽い朝食を取りながら、ミーティングをすることになっている。

すでに玄治と竹田金之助は、庭の芝生に腰をおろしていた。

朝陽がまぶしい。

麻暮がペットボトルと粽を配っていると、郷田狂介があくびをしながら家から出て来た。

「みなさんおはようさん。

あたしはさあ、夜型だから朝は苦手なのよね」

自分もですよ、と金之助が苦笑しつつ云った。

「朝が得意な探偵と泥棒はいませんからねえ」

「ケケケ。

歳をとれば朝も得意になりますよ。

それでは顔が揃ったところで始めようか。

まずは」

麻暮の話が終わらないうちに、郷田が口を開く。

「早速でわるいけどさあ、夜寝ないで考えたのよ。

山風署長に事情を話して、警察か自衛隊に頼むってのはどうなのよ。

海底都市と巨大コード、ふたつ相手じゃ荷が重いわ。

前回は巨大コードだけでも難渋したのよ。

それに連中の手足になっているロボットだって、仰山いるだろうし」

そのことは、と玄治が応じた。

「麻暮先生と事前に相談しました。

結論は、なんのために我々は苦勞をしてきたのかと云うことです。

それに、警察や自衛隊を待つほどの時間は残されていそうにないと」

たしかに、と金之助が賛同した。

「その方面には詳しい自分も、警察や自衛隊に動いてもらうためには、時間も労力も余計にかかりそうな気がします」

この言葉に郷田は納得し、

「そうね」

と云ったきりで、もう何も云わなかった。

麻暮はおもむろに口を開き、

「海底都市と巨大コードを破壊する時限爆弾は、すでに作ってあるんだがね、大きな問題があるのさ。

玄さんに調べてもらったんだが、荒野たちはボクらの思惑を見抜いていて、遠隔装置が稼動しないバリアーを張っているんだよ。

そう、つまり、時限爆弾を取り付ける者の、生死の危険度は、フィフティ・フィフティ。

ひとつはボクがやるとして、もうひとつをやる者の人選をどうするかなんだ」

自分がやります、とすかさず金之助が云った、

「そういうことは自分に似合っていると、みなさんも思うでしょう」

麻暮はひとつ唸ってから、

「それはそうなんだが、親父さんに顔向けが立たない。

ボクと金之助さんを同時に失ったら、金助さんはどうなってしまうだろう」

「そういうことですから、この玄治がやらせてもらいます」

玄はきっぱりと云った。

麻暮は郷田と金之助を代わる代わる見て、

「そういうことので了承してください。

ただし、ボクたち第一陣が失敗した際には、第二陣として用意してもらいたい。まあ、命を捨てるなら失敗の確立は1%に過ぎないのだから、第二陣は必要がないかもしれないんだが。

ともかく生き残った者が、荒野の拘束を永遠のものにしないとイケない。

岩窟王みたいにね。

ケケケ」

「決行は明日正午」

と玄が宣言した。

二〇三〇年、七月二十五日、午後一時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、立原のクルマで観音崎の隠れ家に向かっている。

朝十時に帰路に来た蝶子と麗子は、今後の自分たちの動きについて相談をしていた。

あれこれ語り合ったが、ラチがあかず、とりあえず観音崎の隠れ家へ行ってみようとの結論に達した。

なによりも蝶子は荒野のことが心配で、なによりも麗子は麻暮に会いたかったからである。

聞いていたマスターの立原が、

「それならぼくのクルマで行きませんか」

と声をかけてきたのだ。

「助けてもらったお礼もしていないし。

午後はお店を休みにして、差し入れをいっぱい持って行きましょう」

じっさい、それから立原は多量のミックスサンドイッチを作り、コーヒーを入れるための用具一式をクルマに積んだ。

連絡は、立原が郷田にメールをした。

「五・十日のせいでしょう、ずいぶん混んでいますね」

立原が申し訳なさそうに云った。

「急いでいるわけじゃないからいいの」

蝶子が言ったが、麻暮に早く会いたい麗子は、

「サンドイッチがひからびちゃうわ」

と苛ついていた。

それでも予定より三十分遅れの二時に着いた。

真っ先に出迎えたのは郷田だった。

蝶子たちを出迎えたと言うよりも、サンドイッチとコーヒーを出迎えたのだった。

「ありがたいわ。

なにせ此処は純和風だもんね」
「食べる前に聞いてもいいかな」
蝶子は郷田をクルマの影に引張って行った。
「どうせ解ることだからさ。
何でも聞きなさいよ」
郷田は苛々しながらもそう行くと芝生まで歩いて行った。
蝶子は後に付いて行った。

麻暮に会った麗子は満面の笑みだったが、檻のなかの荒野を見た蝶子は複雑な表情だった。

蝶子は麻暮に形ばかりのお礼を云った後、荒野に軽く声をかけたが、黄金仮面は微動だにしなかった。

代わりに川上と木下が会釈をした。

「科学とか医学とか、何のために学んで誰のために使うのかしら」

麗子が厭味を云った。

蝶子は荒野が聞いていることを念頭に入れて、

「人それぞれだから、そういうことはいいの。

ただ、私の軀を使いたかったのなら、はじめからそう云ってくればよかった。

どちらにしたって答は同じなんだから」

云いながら蝶子は、

(いま〈荒野夫人〉として何をすればいいのか)

頻りに考えを巡らせていた。

二〇三〇年、七月二十五日、午後五時半。

麻暮正作は隠れ家の庭に出て、夕陽を凝視めている。

ふだんは鈍色の鉄仮面が赤黒く輝いている。

青年だったころ、麻暮はよく夕陽を眺めたものだった。

(そう、ボクにも青春と云うものがあつたのだ)

病弱だった青年正作には、友達とか仲間とかがいなかった。

その期間は長く、小林金助が登場するまでは。

正確には、孤児院から(虐待されていた)金助を奪い取るまでは。

そのとき麻暮は三十三歳、金助は十三歳だった。

ふと麻暮は、金助に会いたいと思った。

少年時代から麻暮のために総てを費やして来た金助に。

夕陽がどんどん赤くなってくる。

麻暮はいささか感傷的だった青春時代に、暗誦していた竹久夢二の詩を思い起こ

した。

【赤い日が、大きく雑木林の上に落ちた。
静かに暮れてゆく東京の街を見やると、
何とも言ひしれぬ騒音がぞよめいて耳にしみる。
日の終り！
世の終り！
あの赤い日が、もう、出なくなることはあるまいか】

夕食の食材を買いに行っていた蝶子と麗子が立原のクルマで帰って来た。
麗子と蝶子は、それぞれが勝手な思惑で食材を購入して来た。
麗子は、麻暮に（蝶子が嫌いな）得意のオムライスを、蝶子は、荒野に（麗子が嫌いな）得意のビーフシチューをとの思惑である。
本人が大好物かどうかは度外視して。

いずれにせよ、この夜は、全員オムライスとビーフシチューに舌鼓を打ったわけだ。

二〇三〇年、七月二十五日、午後八時。

観音崎の隠れ家で、猪鹿蝶子と美村麗子の他はみんな眠っている。
居間でも檻でも。
急に静かになったので、
「お蝶さん、何したのよ」
麗子が勘付いて詰問した。
「ビーフシチューに睡眠導入剤を入れたの。
吞まないで溜めておいたのはこの日のためかも」
蝶子は冷然たる口ぶりで答えた。
「わたしが食べないと知ってのメニューなのね。
それにしてもいったいどうしてよ」
麗子の眼が怒っている。
「此処に来るなり、郷田さんにこっそり聞いたのよ。
麻暮さんが、これから何をするのか。
荒野さんが、これからどうなるのか」
「そんなこと聞かなくたって解るわ。
だからって、どうしようって云うのよ」
麗子はまだ怒っている。

「それをあんたと考えたいの。
だからみんなには眠ってもらった」
「わたしは麻暮さんのやることに絶対賛成よ」
麗子は断固たる口ぶり。
「へえ、麻暮さんが、明日自爆してもかい」
「じ、じ、自爆、自爆って何よ」
「だから自爆。
荒野さんが今作っている施設を破壊するためには、自爆の可能性が50%」
「麻暮さんが決めたのかしら」
「それはそうよ。
明日正午の決行で、玄さんとふたり」
「金之助さんと郷田さんは」
「荒野さんたちの見張り。
永久に閉じ込めるための檻を新しく作るかもしれない、とも云ってたよ」
「なんだか暗くなってきたわ」
麗子は本当に暗い表情になった。
蝶子は麗子の肩に手を置いて、
「だから考えたいの。
私たちふたりで何とかできないかって」
「かよわいわたしには、何ともできないわよ」
麗子の眼が潤んできた。
あんた、と蝶子は麗子の耳元で囁いた。
「あんた中学時代、水泳の選手だったじゃない」
「まさかわたしに自爆させようってんじゃない」
麗子の眼は益々潤んだ。
「私も一緒だよ。
私たちの犠牲で麻暮さんと玄さんの命は助かる」
「そんなの厭よ。
わたしが生きていての麻暮さんだもの」
「そう云うと思ったよ。
私も同じだもの。
私たちが行動することによって、荒野さんの命を救えるはず」
「でもさ」
麗子は泣き顔になった。
「でもさ、自爆しなくてもいい方法がある」
「それを先に云ってよ。
お蝶さん、そういうのって、前後の見境がないって云うのよ。
まったく」
いま泣いた鳥が笑った。

「バリアーをはずすの。
あれはきっと川上さんの技術だな」
「つまり、川上さんだけ眼を醒まさせて、威すわけね」
「当たり。
川上さんは威しに弱いって情報を得ている」
「どうやって威すのよ」
麗子はだんだんその気になってきている。
「川上さんは岬美々社長にぞっこらしい。
時限爆弾を未来計画カンパニーの社長室に仕掛けたって、嘘をつくんだよ」
久しぶりに蝶子の両眼が輝いている。
「うまく騙せるかしら」
「あんたが騙すんだから大丈夫。
麗子は嘘をつく女には見えないもの」
蝶子は麗子の肩に手を置く。
これをやられると麗子は反発できなくなる。
「よっしゃ、やったるで」
「その意気その意気、豚の息」
「わたしの仲間を茶化すのはやめてよ」
麗子はそそくさと金之助の腰から鍵を取ると、檻を開けて、川上に青いペンを当てた。

二〇三〇年、七月二十五日、午後十時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、時限爆弾を持ち、アクアリングを着けて、観音崎の海を泳いでいる。

ふたりを包むのは、静かで穏やかな波と仄かで優しい月光である。

蝶子の作戦は当たり、川上宙門は遠隔操作でバリアーを解いた。

川上が、未来計画カンパニーに向かうのと同時に、蝶子と麗子は海に入った。

川上が社長室に時限爆弾が仕掛けられていないことを知るときには、蝶子と麗子の作業はとっくに終わっているはずだった。

海底都市と巨大コードは爆破され、蝶子と麗子は何事もなかった顔をして隠れ家に戻り、麻暮たちの眼を醒まさせる。

その予定だった。

そのつもりだった。

だが、バリアーが張られていた。

眼に見えるわけではないが、蝶子にも麗子にも体感で解ったのだ。

(どうなってるのよ)

麗子が眼で云った。

(ちくしょう、川上め、騙されていると気づいたな)

蝶子は歯ぎしりをした。

(どうやったって着くのはあと一時間でしょ)

麗子はそう思ったが、すでに川上が未来計画カンパニーの夜勤ロボットに連絡して、社長室をくまなく調べさせたなんてことは知らない。

蝶子は〈計画中止〉のサインを麗子に送った。

麗子は渋々頷いた。

濡れ鼠で、肩を落として隠れ家に向かうと、一軒家の隠れ家を背にして、庭に麻暮が立っていた。

鉄仮面が月光に照らされ、不気味に光っている。

「ケケケ。

まるで丘にあがった河童ですね。

やっぱり失敗したか」

蝶子は蝶子らしくもなく愕然として、

「眠っていなかったのね」

「ボクは犬よりも鼻が利くんでね。

睡眠導入剤の臭いが鼻について、ビーフシチューは食べるふりをしたのよ。

と云うより、だいたいボクは、美食をなるべく採らないことにしている。

ケケケッ」

「となると、気づいていてそのまま行かせたわけかあ。

人が悪い、悪過ぎる」

蝶子は蝶子らしくもなく、いかにも口惜しそう。

「猪鹿さんが此処に来たときから、予想はしていましたよ。

ボクは一応探偵だからねえ」

麗子は悔しがる蝶子を見て、嬉しそうに笑った。

「あんた、何よ、その反応」

「だって、しっかり見破られていたんだもの」

麗子はまた笑った。

「ふん、すみませんねえ。

川上さんを逃がしちゃって」

蝶子はわざとらしく云った。

本当は、と麻暮は云った。

「荒野を逃がしたかったんでしょ。

猪鹿さんは荒野ばかり見ていましたからねえ。

眠ったふりをしながらボクは、愚かなあなたが荒野を逃がしても仕方ないと思っていましたよ。

そのときは荒野もろとも爆破させるつもりでしたがねえ。

ケケケ」

「愚か、愚かですって」

蝶子は蝶子らしくもなく顔色を変えた。

美人さんは、と麻暮は静かに云った。

「怒ってはいけませんね。

怒ると美人は般若になってしまう。

浅はかな考えが、どういう結果になるか、解ってもらうためにそのまま行かせたのですよ。

あなたは才色兼備の東大大学院生で、天が二物を与えたと、ご自分でも自信満々でしょうがね。

ボクに云わせれば、世間知らずのお嬢さまでしかない。

時限爆弾抱えたお嬢さま。

ケケッ」

「ちくしょう、くそったれ」

蝶子は吐いた。

「そう、その通り。

醜いボクも美しいあなたも、どちらも同じ畜生で、同じ糞ったれですよ。

莫迦莫迦しいが、これが現実です」

蝶子は地団駄踏みながら、

「荒野さんは、荒野さんは、そんなに荒っぽい言い方を決してしない」

地面に向かってつぶやいた。

「それは悪党だからよ。

悪党は、頭の隅で、己が悪党であることを解っている。

優しい言葉と甘い声音でバランスをとるしかないんですな」

「なるなる、なるほど」

笑顔が絶えない麗子に、こんどは鉾先が向かう。

「なるほどじゃありません。

ケケッ。

美村さんも猪鹿さんの云いなりになっているようでは、将来が心配ですね」

「わたしの将来の心配をしてくれるのね」

麗子は悪びれない。

「ケケケ。

誘う阿房に、誘われる阿房。

どっちが阿房かと云うと後者ですね」

「すみません、わたしが阿房でした。

わたしがお蝶さんを止めなければいけなかった」

麗子が認めてしまったので、麻暮は声をなくした。

しばらく（具体的には五分）三人は無言で庭に佇んでいた。

ようやく麻暮は口を開く。

「それではみんなを一旦起こして、コーヒーを飲みましょうか。
詳しい報告をしてもらわなければ」

「はい」

と麗子は素直に云い、蝶子は黙って首肯した。

二〇三〇年、七月二十六日、午前二時。

麻暮正作と玄治は隠れ家の庭に居る。

みんなが寝静まってから、麻暮は玄を促して庭に出たのだ。

「とんだ茶番でしたね、麻暮先生」

蝶子と麗子の仕出かしたことに、玄は怒る以上に呆れていた。

「ケケッ。」

たしかに茶番だが、ひとつだけ手柄がありますよ」

「そんなものがあるんですか」

「玄さん、気づかないかね。」

バリアー解除の遠隔操作を川上ができるってことさ」

「それはそうですが、その川上は檻のなかにいません」

「ケケ。」

玄さんにとっては、檻にいる動物ではなく野にいる獣でないと、やっつける対象にはならんでしょう」

「先生、つまり、川上を殺す」

「玄さん、そういう殺伐とした言い方はやめましょう。」

もう殺し屋ではなく、必殺始末人なのですから」

「つまり、川上を始末する」

「バリアー解除させてからね。」

こういうことが発生する予想が、玄さんもボクにもできたから、警察や自衛隊の支援をあえて仰がなかった」

「たしかにそうでしたね」

「川上も木下も、父親もそうだったが、威したり騙したりの次元では駄目で、完全に始末する必要があります」

麻暮の両眼が残忍な輝きを放った。

「解りました」

「昔は金助さんにやってもらったが、今は玄さんにやってもらうしかありません」

「解っています」

玄はすぐに木下に手錠をかけて檻から出した。

【解放されたからそちらへ行く】

木下に川上宛そうメールをさせた。

それから玄は木下を立原のクルマに乗せて、川上がいる未来計画カンパニーへ向かった。

そのころ、眠れずにいる蝶子は、麗子も眠れないでいるのを確かめると、蒲団のなかからそっと声をかける。

「ねえ、麗子」

「なあに」

「こんなこと知ってるか」

「こんなことって」

「たとえばね、高慢ちきな女がぎゃふんとやりこめられると、やりこめた相手に好意を持つってこと」

「なにそれ」

「愚かだの莫迦だの阿房だの」

「でなくて、好意のこと」

「たとえばの話よ」

「嘘。」

それって、お蝶さんと麻暮さんの話でしょ。

駄目、駄目、ぜったい駄目よ」

「あんた、なに大きな声出しているの。

みんな起きてしまうでしょ」

「みんな起こして、お蝶さんのイケズな思いを伝えなさいよ。

きっと、殺されるから」

「麗子には殺されても、みんなは解ってくれるわ」

「麻暮さんに虐められた腹いせに従妹を虐める般若の気持なんか、解るわけないわ。

だいたい、荒野さんにご執心なくせに」

「それはそれ、これはこれ。

荒野さんはサイボーグ化してるからね。

あんたみたいに肉体的なつながりではないわ」

麗子は泣き声になって、

「そんなこと、どうして解るのよ」

「そんな声するから解るのよ。

何年姉妹以上のつきあいをしてると思ってるの」

「たったの二十年よ」

「あんたが生まれたときから私は知っているけどさ。

こいつは【ウイングフム】そっくりじゃないかと思ったね」

「何それ」

「ニューギニアのお化けで、樹木のなかに棲んでいる女霊だよ。
男がその樹木の傍を通ると、引きずりこんで犯しまくるんだ」
「ひどい。
わたしにだって撰ぶ権利はあるのよ。
男ならだれでも犯すわけじゃないわ」
「ほら、犯すって云ったでしょ」
「もう絶交よ」
「それは絶好の機会だけどさ。
太陽が西から出たって、あんたが私と別れられるわけがないよ」
「ぐやじい」
麗子は掛蒲団に顔をうずめた。

二〇三〇年、七月二十六日、午前七時。

観音崎の隠れ家に戻って来た玄治が、庭で待っていた麻暮正作と相対している。
「木下も川上も始末しました」
玄はひとことで報告した。
「ごくろうさん」
と云った麻暮は、江ノ島方面に向かって手を合わせた。
「抵抗しなかったのだから、苦労はしませんでした。
ただ、始末は久しぶりなので、まだ血の臭いがします」
「遺体の始末は」
「未来計画カンパニーの敷地内に埋めました」
「ごくろうさん」
とまた云って、麻暮は玄の顔を凝視した。
(半分は本当ではないかもしれない)
と思っただけ、口には出さなかった。
もしそうだったにしても、それも含めて玄を信じていた。
(いずれにしても玄さんのことだから後顧の愁いなくやってはいるのだろう)

麻暮の推察通り、玄の報告は、半分は本当ではなかった。
玄は木下を楯にして、未来計画カンパニーの防犯カメラから姿を隠して入り込んだ。
社長室の前まで行くと、玄は用済みの木下の頸動脈を匕首で深く切った。
木下は声もなく崩折れ、壁と床に多量の鮮血を吐き出した。
玄は血の付いた匕首を手にしたまま、ノックもせず鍵がかかっていない社長室に入った。

暗かったので電気のスイッチをつけた。
最初に玄と眼が合ったのは、全裸の岬美々だった。
寝ぼけ眼の美々は、やはり全裸の川上と手足をからませて、ソファで眠っていたらしかった。

川上宙門も眼を醒まし、血の付いた匕首を見て震え出した。
美々は、玄が川上を殺しに来たことを察知すると、ソファから転げ落ち、そのまま床に土下座して、切々と川上の命乞いをした。
「川上さんを殺すなら私も一緒に殺してください」
情にほだされたわけではなく、美々に恩を売っておくことは後々便利かもしれないと咄嗟に考えた玄は、川上に荒野と縁を切ることを約束させると、木下の死体の後始末を美々に頼んで引き上げて来たのだった。

「では、予定通り、本日正午に決行でよろしく」
麻暮が云うと、
「それまで仮眠をとらせてもらいます。
あとはロボットたちがどういう動きをするかですね」
そう云ってから、玄は家に入って行った。
麻暮は庭の芝生で座禅を組んだ。

二〇三〇年、七月二十六日、正午。

麻暮正作と玄治は、予定通り観音崎の海に入っている。
アクアラングに時限爆弾をぶらさげて泳ぐ姿は、糞を付けた金魚に似ている。
ふたりは海底都市に近づいて行く。
(妙だな)
麻暮が玄を見る。
(たしかに妙ですね)
玄も麻暮を見る。
ロボットたちのいる気配がない。
(今日はお休みなのかな)
麻暮はそう考える。
(川上が裏切ったか)
玄はそう考える。
(としたら再度バリアーが張られているか)
玄は死を覚悟した。
麻暮は初めから死を覚悟している。
簡単な相手ではないからだ。

ロボットたちがいないのは、荒野の命令が下ったとしか思われなかった。
それでも麻暮と玄は、それぞれ海底都市の中心部と巨大コードの付根に時限爆弾を据えた。

麻暮は時間を確認した。

郷田が時限爆弾のスイッチを押すまであと十五分。

同じ頃、竹田金之助は檻のなかを、檻のなかの荒野大三郎を眺めながら、頻りに首を傾げていた。

その様子を見ていた郷田狂介が声をかける。

「どうかしたの」

「何かがちがうんですよね」

「何がちがうのよ」

「その何かが解らないんです」

金之助はまだ首を傾げている。

「それじゃ気の迷いかもよ」

「猪鹿さんと美村さんはどこへ行ったのでしょうか」

「どこって、着替えを持ってきていないからって、早朝に立原さんのクルマで一旦帰ったじゃない」

「そうでしたっけ」

「金之助さんったら、まだ認知症になるには早いんじゃないの。」

それともまちがえて赤ペンに触っちゃったのかしら」

「ちなみに自分たちはあの檻の見張り当番を決めてなかったですよ」

「だってそんな必要ないもの。」

川上と木下は玄さんが始末したらしいし、いまは軀も心も弱っている荒野大人一人だけでしょ。

脱獄なんかできるわけないもん」

「だれが軀も心も弱っているって決めたんですか」

「それもそうよね。」

でも檻に入れられてから何も食べていないし、全く動かないし、あれで弱っていませんでしたら化け物だわ」

「だから、何かがちがうんですよね」

「だから、何がちがうのよ」

「郷田さん、そこから荒野の姿を見て、妙だと思いませんか」

郷田はわざとらしく首をのばして、

「そうねえ、どれどれ。」

そうねえ、黄金仮面がいつもより輝いているかもね」

思わず金之助は手をたたき、

「そう、それなんです。」

ちがう何かは、それなんですよ」

「黄金仮面がいつもより輝いていちゃ、おかしいかしら」

「つまり、その、前に麻暮先生に聞いたんですが、荒野の黄金仮面は、荒野の精神と肉体を反映させていると」

「だから何さ」

「荒野の精神と肉体が、今あんなに輝いていていいものでしょうか」

「いいもわるいも、そこが荒野大人の凄いところかも」

「しかし少なくとも数時間前は、あんなに輝いてなんかいませんでしたよ」

「だったら、何だって云うのよ」

郷田はいらついてきた。

時限爆弾のスイッチを押す、約束の時間が迫っていた。

「ねえ、金之助さん、麻暮さんたちが帰って来てから、スイッチを押した方がいいんじゃないかしら」

郷田は提案した。

「それは約束違反だから、麻暮先生に叱られます。

時間通りに押さないと、ロボットたちに解除される恐れが高いと云われているでしょう」

「そんなら金之助さん、このスイッチ一緒に押してくんない」

「なぜですか」

「万一のことがあったら、責任を一人で背負えないでしょ」

「自分なら背負いますが」

金之助は断固として云った。

「なら、あんた一人でやってよ。

もう約束の時間が来たわ」

「やっぱり一緒に押しましょう」

「ほら、そうなるでしょ」

郷田と金之助は共に大きく深呼吸してから、スイッチを押した。

爆発音は出ないはずだが、五分後に海が一瞬盛り上がるはずである。

ふたりは望遠鏡を手に、息を呑んで五分間待った。

同じとき、麻暮と玄はバリアーに邪魔されていた。

どうもがいても、戻れない。

今回のバリアーは遠隔操作を妨げるばかりでなく、海底都市に近づいた者が戻れないものであった。

麻暮と玄はお互いを見詰めたまま観念した。

(何とか麻暮先生だけは助けたい)

玄は思考を巡らせて、その一点に集中した。

(自分はここで死んでも本望だが、荒野に生があるかぎり、麻暮先生には生きていてもらわねば困る)

正確に五分後、海が一瞬盛り上がったのが確認された。
金之助にとって、
(やった)
との思いが三割で、
(やってしまった)
との思いが七割だった。
金之助はまたまた首を傾げた。
(何かがちがう)
終わったと云う安堵感よりも不安感が募ってくる。
金之助は檻に近づいた。
荒野の姿を凝視した。
第六感が働いたのか、金之助はつと檻を開けると、荒野に近寄り、黄金仮面に手をのばした。
極めて微小な悲鳴に似たものが聴こえた気がした。
その悲鳴に示唆されて、金之助は黄金仮面を剥ぎ取った。
そしてこんどは金之助が小さくはない悲鳴をあげた。
黄金仮面の下から現れたのは、荒野大三郎の醜い顔ではなく、紛れもなく猪鹿蝶子の美しい顔だったからだ。
「郷田さん、やばい、やばいよ。
危ない、麻暮先生と玄さんが危ない」
金之助は叫びつつ振り向いて郷田を見たが、郷田は声もなく固まっていた。

二〇三〇年、七月二十六日、午後三時。

竹田金之助と郷田狂介は観音崎の隠れ家でひたすら待っている。
だが、麻暮正作も玄治も、戻って来る気配さえない。
猪鹿蝶子は檻のなかで身を屈めおとなしくしている。
自分が身代りになって荒野大三郎を逃がした結果を予想しないではなかったが、まさか麻暮と玄の爆死までは考えつかなかった。
もう駄目ね、と郷田がつぶやいた。
「この時間では駄目ね」
「帰る予定の時間からもう二時間ですからねえ」
金之助は天を仰いだ。
(郷田の提案を愛ければ良かった)
との思いが頭のなかに充満していた。
金之助の様子を察して、
「すべてはこいつのせいよ」

郷田は蝶子を邪険に指さした。

その剣幕に、檻のなかの蝶子は後ずさりしたが、表情は変わらなかった。

私は、と蝶子は云った。

「こいつじゃないよ」

「猪鹿蝶子のせいよ」

郷田は云い変えた。

「荒野蝶子と呼んでね」

蝶子は平然と云った。

郷田は憎々しげに、

「くそったれ蝶子よ」

金之助は毒づく郷田を宥める口調で、

「郷田さん、それはやはり荒野大三郎のせいなんですよ。

猪鹿さんが逃がさなくっても、似た結果になっていたと思いますね」

「そうかしら」

郷田は口をとがらせた。

「麻暮先生は荒野を生涯監禁したいと考えていたようですが、荒野こそ抹殺しなければならなかったのです。

海底都市や巨大コードを破壊する前に、荒野の存在を破壊しなければならなかったのです」

金之助はいまになって自分の考えを吐露した。

「そんなこと麻暮さんは解っていたわよ。

解っていても、何とか荒野大人を殺さずに済む方法はないかって模索していたのよ。

その理由の大きなひとつは、荒野大人にぞっこんの美女がいるって事実ね。

今回の件は、その模索中の出来事であって、あたしは不慮の事故って考えているわ。

ただね、考えと気持ってちがうもんでしょ」

郷田は涙ぐんでいた。

「自分は同じだと思いますが。

どちらにしたって、親父の金助には報告できません」

金之助も歯ざしりしていた。

そのとき、蝶子の口がおもむろに動く。

「そんなに悲観しなくてもいいんじゃないの。

麻暮さんは不死身だし、玄さんは海の男だし」

思わず郷田は金之助と見合って、

「それもそうね」

だいぶ（正確には三十三分）経って、郷田は、

「ところで」

「ところで」

と金之助は鸚鵡返し。

「あたしたち、どうしようかしら」

「自分たち、どうしましょうかね」

「まずは処分よね」

郷田は蝶子を見た。

「彼女のスマホ等々なら処分しましたよ」

金之助が云った。

「彼女のブツじゃなくって彼女自身の処分よ」

郷田が云った。

「檻のなかだから処分されてるんじゃないですか」

金之助が聞いた。

「あれじゃ、麻暮さんたちが浮かばれないわ」

「それなら、殺しますか」

金之助はあえて蝶子に聞こえる声で云った。

「あのままにして、あたしたちが此処を離れたら、どうなるかしら」

「まあ、餓死すると云うのが常識でしょうね」

「なら、それで処分完了ね」

「けれども」

「けれども」

と郷田は鸚鵡返し。

「自分たちがいなくなったら、荒野が助けに来るかも」

「荒野大人はそういう性格じゃないわ」

「しかし内縁の妻だと云うじゃないですか。

本人も荒野蝶子と呼んでくれと」

「かつてその妻を見殺しにしたのよ。

その妻が麻暮さんの妹さん。

だいたいさあ、男と女って、生まれつき違うのよ。

女は助けてほしいと待っていても、男にとっては一人の女より仕事が優先ね。

男はやるまでが大事、女はやってからが大事」

「おととと、郷田さんの言葉だから、説得力ありますね。

それならある意味で賭けと云うことで」

金之助の提案に郷田は頷き、

「そう、くそつたれ蝶子が餓死したら、あたしの勝ち」

「はい、猪鹿さんが荒野に助けられたら、自分の勝ち」

郷田と金之助はハイタッチをした。

「バカヤロー」

と蝶子が犬の遠吠え。

二〇三〇年、七月二十七日、午前十時。

美村麗子は鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」に居る。

カウンターで頬杖ついて、スマホとタブレットの画面ばかりを見ている。

頼んだアイスコーヒーの氷が溶けてしまっている。

「ずいぶんと浮かない顔ですねえ」

たまりかねたマスターの立原が声をかける。

「あのときお蝶さんは確かに観音崎へ戻ったわね」

麗子は立原に確認をした。

「ええ、荒野さんをひとりにしておくことは、やっぱりできないって」

「それでわたし心配になって」

「あれこれ情報器具を勝手に猪鹿さんに押し付けたんですよね」

「そうなんだけど、昨日の午後になってお蝶さんの情報は完全に途切れたの」

麗子はカウンターを叩きたい衝動にかられた。

だが立原を前にしてできないので、自分の頭を叩いた。

立原は麗子の様子が怖くなって、

「心配ないですよ、電池切れかも」

「いいえ、電池が切れる場合は、その情報もわたしに伝わってくるはずなの」

麗子は断固たる口調で言った。

「どこか遠方へ出かけたとか」

「GPSでは、昨日の昼過ぎまでは観音崎に居たのよ。

本人から連絡来なくても、常に情報は入っていたわ。

そしてどこか遠方へ出かける気配があれば、その情報すらもわたしに伝わってくるはずなの。

隠れ家の上空にドローンを飛ばしているんだから」

麗子はさかんにスマホとタブレットを操作してみた。

「まあ、昨今は便利と云うか、便利過ぎると云うか」

「とにかく全く遮断されたわ」

麗子はスマホをカウンターの上に投げ出した。

「と云うことは、猪鹿さんに押し付けたあれこれの情報器具が破壊されたわけですよ」

「それはきっとそうなの。

でも一体だれがそんなことを」

立原は指を折って、

「麻暮さんと玄さんは午後は海の中のはずですから、そのころあそこに居るのは、郷田さん、竹田さん、荒野さんの三人のみ」

「だれもそんなことをやる必然性がないわ」

立原は言葉を運びながら、
「それなら、必然性を、生み出すことを、もしかすると、猪鹿さんが、やってしまった、と云うことではないですか」
「それは具体的に何かしら」
立原はわざと困惑の表情を作って、
「具体的に云えるくらいなら週刊誌の記者になっています」
「きっとそうなんだわ。
お蝶さんったら、またきっと何かやらかしたんだわ。
ああ、戻ると云ったとき、無理矢理でも引き止めればよかった。
まったく人騒がせな人なんだから」
麗子は唇を噛んだ。
立原は手を打って、
「そうだ、念のために郷田さんにメールをしてみますね」

【美村さんが心配しています。猪鹿さんは無事でしょうか】

そうメールを入れると、すぐに返信があった。

【彼女は昨日午後三時過ぎに出かけました。行先は未来計画カンパニーと云っていましたが、本当かどうか確かめる術は全くないのです。なお特別な事情があつてあ

た
そう返信したときは、郷田はすでに金之助と共に鶴沼の事務所に着いて、十時間以上経っていた。

着くなり郷田は、シャワーも浴びずそそくさとキッチンに立った。

迷わずパスタを茹でて、手際よく野菜を炒めた。

トマトケチャップたっぷりのナポリタンを作り、味見をすると、満足げに頷いた。

「こんな美味しいスパゲッティは、イタリアンレストランでも食べられないわ」

自画自賛すると、金之助にもすすめた。

金之助はナポリタンを食べ始めて三分後に吐いた。

七分後に下痢までした。

血の色の吐瀉物だった。

立原は郷田のメールを麗子に見せた。

麗子は首を傾げて、

「昨日の午後三時過ぎならお蝶さんの情報が途切れたころね。

何となく辻褄の合うメールだけど、確かめる術は全くないとか特別な事情があつてとか、齒に衣を被せた感じが胡散臭いわ。

麻暮さんたちの計画がどうなったかも書かれてないし」

「つまり猪鹿さんは郷田さんたちに何かされたと」

「断定はできないけど。

ねえ、観音崎の海で爆発があったってニュースはなかったかしら」

「テレビは昨日も今日もつけっぱなしだけど、海のなかの一瞬の爆発なんてだれも気にしないのでは。

鯨が潮吹いたと思ってるでしょう。

昨今パソコンで見られない情報は、テレビでも見られませんよ」

「観音崎に鯨はいないわ」

「特殊な時限爆弾だって云っていたから、爆発音はないのかもしれませんがね」

と云いながら立原がテレビ画面に目をやると、一軒家が炎に包まれている映像が映っていた。

「あれあれ、これって、まさか、あの家じゃないですよね」

立原が声をあげた。

「あああ、そうよそうよ、もしかしてお蝶さんが燃えているんじゃないでしょうね」

麗子も声をあげた。

あげたままタブレットを操作してドローンの映像を見ると、たしかに観音崎の隠れ家が燃えている。

そして上空にはヘリコプター。

消火用ヘリコプターでないのは、炎に近づいているのではなく炎から遠ざかっているからだ。

麗子はタブレットでヘリコプターを追いかけ、最大に拡大してみた。

運転手席にはパイロットのロボットと、黄金仮面、そして、

「あ、あ、あれはお蝶さんだわ」

ヘリコプターは画面からすぐに消えたが、麗子は蝶子の無事を確認して安堵した。

同時に郷田に対する怒りが湧いた。

(郷田さんは嘘をついたのね)

その丁度十分前。

荒野大三郎が乗ったヘリコプターは、観音崎の隠れ家の頭上に来た。

直後、ロープで降りて来た荒野が屋根を破壊し、そこから猪鹿蝶子を救い出した。

ロープが引き上げられると、小爆弾が落とされ、隠れ家は爆発炎上した。

荒野の、

「プフイ」

と云う笑い声は消されたが、黄金仮面は炎に照らされて輝いていた。

二〇三〇年、七月二十七日、午後一時。

美村麗子は郷田邸に居る。

「どうして嘘をついたのよ」

怒りにまかせてすっ飛んで来た麗子は、烈しく声をぶつけた。

「まあまあ、そうムキにならないでもいいじゃん。

話せば長いけどさ、あたしとしちゃあ、嘘をつくしかなかったのよ」

受け流した郷田は、居直りの表情。

「もしかしてお蝶さんを檻に監禁したんじゃないの。

荒野さんが助けてくれなければどうなっていたのよ」

麗子の口調はまだ烈しい。

「そんなことどうして知っているのよ」

「パソコンの映像で見たの」

「あたしは餓死すればいい気味だって思っていたけど、それは残念」

平然と郷田は云った。

「ひどい」

「ひどいのはだれかしら。

檻に入っているはずの荒野大人が、蝶子を助けられたのはどうしてなのよ。

その前に蝶子が、荒野大人を逃がしたからじゃないの、ふん」

麗子は声を呑み込んだ。

(やっぱりお蝶さんは、やらかしたんだわ)

「それで、麻暮さんはいまどこなの」

怒りを鎮められた麗子は、突慳貪に聞いた。

(きつとここに居るんだわ)

と思っていたのだ。

「それがさあ、くそつたれ蝶子のせいで、麻暮さんも玄さんもきつと粉微塵よ。

猪鹿が逃がした荒野大人が、おそらく何かやらかしたのよね」

「げっ、嘘でしょ」

思わず麗子は叫んでいた。

あたしだって、と郷田は云った。

「嘘であってほしいわよ。

二階で金之助さんが休んでいるから、たたき起こして確認してみたらいいわ」

「こんなときによく眠ってられるわね」

「眠ってるんじゃないのよ。

ショックで寝込んでしまったのよ」

麗子はまた声を呑み込んだ。

麗子もショックで寝込んでしまったかった。

「で、で、でも、粉微塵になった粉を見たわけではないでしょ」

麗子は聞いた。

「粉って、粉って、そんなもの見たわけでもないし、見たくもないわ。

それでもさあ、時間にあれほどきっちりしている麻暮さんが、約束の時間に戻って来なかったのよ」

「で、で、でも、あ、麻暮さんは、ふ、不死身なんですよ」

麗子の声は震えていた。

「それでもさあ、こんどの仕事はどう転んでも危険なもの。

そうそう、麻暮さんの遺書が残っているわ。

いわゆるビデオメッセージというやつね。

万が一のときはみんなに見せて、無事に戻ったときは消滅させてほしいと、海に入る前に頼まれたのよ。

あたしはさあ、何度も見直しているけどさあ、これってホントは美村さんに見せたくて作ったんじゃないかしら」

と云って郷田が見せたのは、スマホの画面（動画）である。

麗子は郷田のスマホをひったくって、凝視しつつ耳を澄ました。

【諸君、我が同胞よ。

天涯孤独のボクはこういうものを遺さない主義だけれども、どうかボクの心変わりを笑わないでおくれ。

なぜならもしかすると、ボクに子供ができるかもしれないからだ。

諸君、我が同胞よ。

万一、万一、ボクの子供ができたなら、どうか、ボクの代わりに可愛がってあげてください。

ケケケ。

生まれるかどうか解らない子供のことを頼むなんて、〈恋慕の道思いよる心あり〉の妙な親バカだけれども、どうか笑わないでおくれ。

むろんボクはご存じのとおり不死身だし、窮地にも慣れてはいるのだけれど、なにしろ相手が相手だからどうなるかは神のみぞ、いや悪魔のみぞ知るだ。

ケケケ。

消えるときはボクは笑って消えるから、諸君も笑ってボクの最期を見送ってほしい。

〈いずれの道にも別れを悲しまず〉

そうしてボクのがいつも笑っていたことを、子供に教えてあげてほしい。

諸君、我が同胞よ。

さらばだ、ありがとう】

鉄仮面は終始穏やかな微笑みをたたえていた。

だが、

(鉄仮面が泣いている)

としか麗子には思われなかった。

それから麗子はお腹に手をやった。

そう云えばなんだか、そう云われればなんだか、できている気がしてきた。

そう感じると麗子は大きく笑いたかった。

同時に大きく泣きたかった。